

全校の皆さん、おはようございます。

先日、一年生の東本願寺研修が行われました。浄土真宗の教えを建学の精神とする伊那西高校にとって、学校のルーツを訪ねるこの研修は、非常に大切な位置づけの行事として、これまで大事に受け継がれています。

一方で、「わざわざ京都まで行かなくてもいいのではないか」という意見もあるかもしれません。いまはインターネットで調べればすぐに写真や情報も出てくるし、お土産もインターネットで買うことができますから、時間やお金や労力をかける必要性を感じないという人もいるかもしれません。

この研修のことに限らず、現代ではインターネットやAIの発達によって、人間が動かなくても、パソコンやスマホの画面上で、手軽に「答え」を手に入れられるようになりました。イラストや文章は特に、整ったものを素早くAIが作ってくれます。時間や労力がカットされるので使わない手はない、という世の中の風潮になっていきますが、どこもなく大切なことを見失っているような気持ちにもなります。

思想家の内田樹さんは、人間が書いた文章とAIが書いた文章の違いについて、「身体があるかないか」と言いました。「身体がある」というのは、そこに身体、つまり生命（いのち）を持っている書き手がいて、文章を書きながら、考えたり悩んだり、また自分で書いた文章に自分自身が影響を受けて書き手自身が変化したり進化したりしていく、ということを意味します。ですから、話が脇道にそれたり、同じ事を繰り返したり、意味不明なことを書いたり、一見無駄なようなことも多くあります。人が文章を書くというのは、できあがった文章のそれに価値があるだけでなく、文章を書くこと自体に書き手にとっての大きな意味があるのです。

対して、AIは素早く情報を処理して寄り道することなくすぐに答えにたどり着いて文章を作りますが、それだけです。AIには身体も生命もありませんから、AIにとって文章を書くことの意味はありません。AIに「答え」は出せても、「問い」が出てくることはありません。けれども、コスパやタイパという現代の価値観では、「答え」が素早く手に入るAIが、人間の「問い」よりも尊ばれます。

親鸞聖人は「真実」ということを特別に大事に使われます。「真」という字に「実」という字が付くこの言葉は、つまり、いくらかもつともらしい「答え」であっても、自分のうえに具体的に「実」を結ばなければ、それはただの情報や知識であって「真実」とは言えない、ということ です。本当の満足となる「真実」は何なのか、と親鸞聖人は著作を通して探求されました。ですから、親鸞聖人の書かれた文章にあるのは「答え」ではなく「問い」です。そして、親鸞聖人の「問い」をまた私たちが身体を通して問うていくところに、生きた浄土真宗の学びがあるのです。